

暑いあつい8月の初旬に行われた“ふっこうのかけ橋 2017”。あれから4ヶ月が経ち季節は巡って今は寒い冬の始まりを迎えています。たった4ヶ月なのに、なぜか遠い昔のように感じられるのは、それだけ充実した時を過ごせたからかもしれません。みんなどうしてるかなあ……。懐かしい一人ひとりの顔を思い浮かべながら、クリスマスプレゼントにとアルバム作りが始まりました。

プロジェクトが始まって6年。福島県中通りからスタートしたプログラムは、このかけ橋を渡って沢山のひととの出会いをもたらしています。そして今回はようやく「浜通り」と呼ばれている沿岸部の原町からも新たな参加者を迎えることが出来ました。津波と原発事故の生々しい体験を再度聞く機会が与えられ、より充実したプログラムとなりました。また広い福島県では、浜通りに暮らす人々にとって、新幹線を利用したの来神は福島市内での前後泊が必要となるため、初めての飛行機利用もありましたが、予期せぬ大型台風の襲来に帰福は予定を変更し、新幹線で一路仙台へ。台風が東北に来る前にそれぞれ我が家へと帰り着かれました。たくさんの楽しい思い出に感謝！と喜びのお礼状が届いています



また、原町は現在「カリタス南相馬」と名称変更されていますが、元は原町ベースと呼ばれ、多くの救援ボランティアを受け入れて被災者支援を行ったところです。5月号でお伝えしましたフランスケン（海星女子学院経営母体修道会）のSr.佐々木の赴任地でもあり神戸地区の社会活動委員会がシスターの要請に応じてお茶会への支援を継続して来た関係から、毎年8月には家族訪問を兼ねてグループ（コンコルディア）の代表の方が来神され、現地の様子を伺って来ました。

また、カトリック新聞11月12日号の1面に掲載されている“わすれない”には浪江町の方々

が暮らしていた宮代仮設のことが取り上げられていましたが、ここでもプログラムの初期に深く関わってくださった松木町のシスター方や、プログラムに当事者として参加されたお母さんと子供たちが「愛の支援グループ」と名付けられた教会内グループの一員として関わっておられ、シスターやお母さん方が仰っていた「神戸で受けた暖かい支援を自分達だけのものにするのではなく、福島に戻り自分達の暮らしの中で分かち合えるようにしたいです」との思いが結実しているように感じられます。ただ、相次ぐ避難解除（一部を除く）によって、落ち着き先の決まった人々の転居が進み、仮設入居者の減少と共に、集会所としての利用が出来なく



なり、定期的に行って来たお茶会等の支援は終了せざるを得なくなっているそうです。時と共に姿形は移ろって行きますが、取り残された数少ない入居者のためにこそ、Face to Faceの訪問支援の役割が大きな意味を担っているのではないかと思います。築いてきた「かけ橋」や「はしご」が外されるのではなく、つながり続けるための変化の時期を迎えているのかもしれない。私たち“ふっこうのかけ橋”実行委員会のスタッフも取り組みを継続する中でこの活動の意義を再確認し、より良いプログラム作りが出来ることを願っています。さて、今回の取り組みでは、さらに若者たちからの新しい動きがありました。それは、毎年ボランティアとして関わってくれている六甲学院の生徒たちからの提案でした。班のリーダーとして直接ことも達に関わった彼らは高校生として出来ることを模索し、実行委員会に提案をして来ました。内容については人的、時間的にも練り直しが必要となり2度の話し合いの後、3度目の再検討のため提案書を持ち帰っています。教会という枠を越えて、やっと若者につながったとの手応えを感じながら3度目の提案書を心待ちにする今日この頃です。